

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：53101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380260

研究課題名(和文)ピアトリス・ウェブの福祉経済学の研究：フェミニズム・福祉国家論・社会経済学

研究課題名(英文) Research on Beatrice Webb's Welfare Economics: Feminism, Welfare State and Socio Economics

研究代表者

佐藤 公俊 (SATO, KIMITOSHI)

長岡工業高等専門学校・一般教育科・嘱託教授

研究者番号：00178716

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会改革家として、社会調査家として高名なピアトリス・ポッター・ウェブの生涯に渡る経済学と福祉経済の研究を、社会経済学として理論的、実証的に位置づけて評価した。それは、ピアトリスの、フェミニズムを導入した福祉国家論と社会経済学(ピアトリスの若い時の表現では「社会学的経済学」とを基軸として構成される福祉経済学の理論体系の形成過程を把握し構成し、社会経済学的意義を評価することである。

ピアトリスは、経済学研究を「社会学的経済学」の把握から始めて、集合主義・制度主義に至り、政策論と福祉国家論を通じて、社会科学的な社会経済学に至ったのである。

研究成果の概要(英文)：As Beatrice Potter Webb has been known as famous social reformer and social investigator, this research has evaluated the theoretical and empirical position of her economic studies and arguments of welfare economics over her lifetime, as socio-economics. It grasps the process of the formation of the theory system of her welfare economics introducing feminism, which is based on "sociological economics" (in the expression of young Beatrice) and the policy of welfare state, and evaluates the significance of socio-economics of her welfare economics.

Beatrice started studies of economics and principles of political economy from grasping "sociological economics", leading to collectivism and institutionalism, and socio-economics as social science through policy theory and welfare state theory.

研究分野：経済学説史

キーワード：ピアトリス・ウェブ 福祉経済学 フェミニズム 福祉国家論 社会経済学

1. 研究開始当初の背景

前回の科研費研究(課題番号21530192、研究課題名:ピアトリス・ウェブの福祉経済学とフェミニズム)ではピアトリスの福祉経済学の形成におけるフェミニズムの影響を検討し、彼女によるナショナル・ミニマムの男女平等化につうずる主張を指摘した。また、1886年から1920年代までの彼女の福祉経済学研究の大筋を明らかにした。彼女の福祉経済学は福祉国家論と「社会学的経済学」を基礎として、1910年代末には、おおむね骨格が完成したことを指摘した。

1886年頃から1926年までの経済学や福祉政策の研究成果を背景にピアトリスは、1920年に出版した夫妻の著書の *A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain* (和訳名『大英社会主義社会の構成』) に、その成果を注ぎ込んで同権的な福祉国家体制を論じたのである。

前回の科研費研究では、これらのピアトリスの広い意味での経済研究の、社会経済学的な理論的、および、実証的な位置づけと評価が課題として残された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前回の研究課題も受け継いで、社会改革家として、社会調査家として高名なピアトリス・ポッター・ウェブの生涯に渡る福祉経済研究について社会経済学的な理論的に、実証的に位置づけを行い、フェミニズムの影響も含めて、評価することである。つまり、ピアトリスの、フェミニズムを導入した福祉国家論と社会経済学(彼女の若い時の表現では「社会学的経済学」とを基軸として構成される福祉経済学の理論体系の形成過程を整理して構成し、その社会経済学的意義を把握し評価することである。

ウェブ夫妻はフェビアン協会を主導して政治運動に貢献し、1920年代政権を取った労働党の形成とフェビアン協会の理論的基礎の提供の点で大きな貢献をした。従来の研究では、ピアトリスの社会改革の議論や社会調査の面が主に評価されてきて、彼女の福祉経済学は、日本では筆者の研究以外では、ほとんど扱われてこなかった。しかし、1926年出版の彼女の自叙伝の *My Apprenticeship: 『私の修業時代』* の付録としてリライトされた元の2論文“*The History of English Economics*”:「イギリス経済学の歴史」(1886)と“*The Value Theory of Karl Marx*”:「カール・マルクスの価値論」(1887)から見て、また、自叙伝本文の叙述からも、彼女の福祉経済学は福祉国家論と「社会学的経済学」を基礎としていたことがわかる。

1886年頃から1926年までのピアトリスの経済学や福祉政策の研究として、彼女は1886年の草稿の“*The History of English Economics*”において古典派経済学を批判し、1890年代には協同組合運動を研究した。

1897年出版のウェブ夫妻の共著の『産業民主制論』では男性主体のナショナル・ミニマムが提起されたが、ピアトリス自身は1910年代に女性賃金論争に参加し、1819年の二度目の『マイノリティレポート』では男女平等のナショナル・ミニマムとしての男女平等賃金論と家族手当の必要性を主張した。それらを経て、夫妻は1920年に『大英社会主義社会の構成』を出版し、同権的な福祉国家体制を論じたのである。

本研究が主な関心をおく論点は、ピアトリスの「社会学的経済学」、および、彼女が男女平等のナショナル・ミニマムを軸とした福祉国家政策を展開したことの、社会経済学的位置づけである。つまり、19世紀末以来、ウェブ夫妻が協同組合と賃金などの理論的研究と地方政府などの社会調査をしてゆく中で、ピアトリスが「社会学的経済学」と制度論的政策論を基礎に、政治的实践から取り入れてきたフェミニズムを生かして、男女平等・同権の福祉国家政策を形成した成果を、社会経済学的に位置づけることである。

3. 研究の方法

ピアトリスの経済学研究についての調査は、主に東京の国会図書館、および、英国におけるロンドン経済政治学院(London School of Economics and Political Science)の図書館と大英図書館(British Library)で行った。それに基づく報告原稿を、経済理論学会、経済学史学会、および、社会理論学会の研究會などで報告し、そこで受けたコメントをもとにブラッシュアップして、2本の論文を発表し、2冊の共著作を出版した。現在単著の出版用の原稿を作成している。平成25年度～28年度の研究計画実施状況を述べる。

(1) 平成25年度

ピアトリス・ウェブの福祉経済学の形成過程について、ピアトリス・ポッター時代の社会経済学の原形の形成と、進化主義と社会経済政策論への関心について検討した。その概要を2013年10月の経済理論学会で、「ピアトリス・ウェブの経済学の方法の変遷」として報告した。それはこれまでほとんど研究されてこなかった1886年の経済学研究の方法と変化を明らかにし、その意味を把握するものであった。それを、「ピアトリス・ポッター(・ウェブ)の経済学研究:1886年の独立宣言; “*The History of English Economics*”草稿についてのハーバート・スペンサーとの論争」として、『社会理論研究』(社会理論学会、第15巻、2014年)に発表した。

(2) 平成26年度

前年度に引き続き、ピアトリス・ウェブの福祉経済学の形成過程の内、ピアトリス・ポッター時代の研究について検討した。

ピアトリスのマルクス価値論批判と価値論把握の形態論的側面を経済理論学会で報

告し、「ピアトリス・ポッターのマルクス価値論批判」として『長岡工業高等専門学校研究紀要』（第50巻、2014年）に発表した。

（3）平成27年度

平成27年度は、若きピアトリス・ウェブの福祉経済学の形成過程の研究を深め、ピアトリス・ポッター時代の社会経済思想の把握に努めた。特に社会経済思想の内の社会学的経済学と社会病理学の形成について、1886年と1887年との二つの未発表論文と、彼女とスペンサーとの論争的な意見交換を検討した。平成27年3月東京都の埼玉大学東京ステーションカレッジにて行われた仙台経済学研究会にて「若きピアトリス・ポッターの経済学の形成」の粗稿を報告した。同年8月仙台市の東北大学にて行われた仙台経済学研究会にて同論文を報告した。その後、仙台経済学研究会編『経済学の座標軸』に、同論文を提出し、「若きピアトリス・ポッターの経済学の形成」として第11章に収められた。同書は平成28年4月に出版された。

ピアトリスの経済学評価の基礎となる社会経済学の方法論を検討し、平成27年8月の八王子市のSGCIMEの夏季合宿研究会にて、「宇野段階論における主体、制度主義、社会経済的領域構造 社会的必要労働の商品経済による包摂・編成の進化」を報告し、同論文をSGCIMEに提出した。同論文は平成28年3月に出版されたSGCIME編の『グローバル資本主義と段階論』に収録された。

（4）平成28年度

当年度は著作「ピアトリス・ポッター・ウェブの社会福祉経済学研究」の粗原稿の作成のために研究を進めた。5月の経済学史学会大会報告では、ピアトリス・ポッター・ウェブの経済学的自己形成と恩師のハーバート・スペンサーからの独立に注目し、彼女の初期の社会学的経済学の社会経済学としての意義を報告した。7月の社会理論学会の研究会では、ピアトリスの社会経済学研究と福祉社会体制論での、新しい経済学の原理的な観点の意義を報告した。11月末の英国調査旅行では、彼女の福祉経済学の資料を収集した。翌年1月の近代思想研究会では、彼女のフェミニズムとジェンダーの関係を報告した。3月末の英国調査旅行では、「ピアトリス・ポッター・ウェブの社会福祉経済学研究」の原稿を確認する資料を調査した。

4. 研究成果

本研究の成果として、ピアトリスの「社会学的経済学」から展開した経済理論、および、スペンサーとの論争に由来する、制度論的かつ社会科学的な社会福祉政策論・福祉国家論の社会経済学的評価として、以下の各年度の成果と結論が得た。

（1）平成25年度

「ピアトリス・ポッター（・ウェブ）の経済学研究」論文で次の点を指摘した。

ピアトリスは、1886年8月に執筆した未完の手書き草稿「イギリス経済学の歴史」において、マーシャルが論文「経済学の現状」で述べた貨幣タームでの把握の方法を参照して、演繹的に「真の経済学」を提起した。彼女は、つながる人間関係を社会的本質、つまり、原理として、その人間関係における欲望と能力が経済的な欲望と能力であるとし、それらのつながりが交換価値関係として現れるとする。そして、これらの経済現象を心理的、物質的、心理的/物質的の三層で表現する経済学の新構想を提起した。

1886年10月のピアトリスと学問の師匠のハーバート・スペンサーとの彼女の心のなかでの「論争」では、ピアトリスは、「イギリス経済学の歴史」へのスペンサーからの批判に反論して、個人主義の自由放任主義から介入主義に立場を変えた。そこで、社会学的経済学、社会科学的政策論を強調してスペンサーから自立した。

ピアトリスの1886年の経済学の方法の変化は、人間の本質・原理が現象する対象を貨幣的現象に絞って、個人主義的に社会学的経済学を示したこと。その後、個人主義的ではあるが、各社会領域間の関係を論ずる社会科学的、社会経済的な方法の政策論に移行したことである。これがのちの集合主義的、制度的経済学の出発点となり、その後の彼女の制度的進化的福祉経済学へと展開したのである。

（2）平成26年度

ピアトリス・ポッターの1887年の価値論研究の理論的意義をまとめる。熟年期のピアトリスの福祉経済学は、集合的な集団相互の制度主義と社会進化主義の性格をもつ。一方、1886年当時の彼女の経済学の方法は、個人主義的で人間の本質が現象する経済関係を対象とし、また、政策論として各社会領域における現象間の関係を論ずる社会学的経済学であった。以後彼女は、そこから社会経済学の制度主義的進化論に向かって考察を進めていったのである。

ピアトリスは1887年の「カール・マルクスの価値論」では、「均質な人間労働『生命エネルギーの無差別な支出の凝固』」、つまり、生理的な同質性としての抽象的労働を交換価値の源泉とすることは、「形而上学的全体性と言う崇高な雰囲気」であり「現実世界を離れ」ることで、説得的でないという。彼女は労働だけの価値源泉論を、肉体労働のみの価値説として退け、交換価値の源泉として「様々な程度の強度と様々なに変化する形態での人間の能力と欲望」を論ずることが妥当であると主張したのである。

ピアトリスは40年後の1926年の『私の修業時代』の付録の「本性」論文では、先に見たようにマルクスと弟子たちが価値源泉を

「経済能力、あるいは、…労働」のみで規定し、「第三のもの(交換価値)を作り出すのに第二のもの(欲望)を用いるのを認めることを拒否した」として、「カール・マルクスと彼の学徒」の(抽象的)労働価値説、ないし、労働だけからの価値源泉論を批判した。彼女は、価値の源泉ないし価値の実体は、マルクスの規定する生理的な「抽象的労働」と解した経済的能力だけでは一方的であると批判する。価値の源泉は「経済能力」ばかりでなくてそれと「経済的欲望」の「結合」関係であると彼女は主張したのである。彼女は、普遍的に存在する「エーテルのように、いつでも存在」する「経済的欲望が」「経済能力」と共に「価値の共通の親として」重視されなければならない、価値の源泉が「経済能力」と「経済的欲望」の「結合」関係であるという。それは、生産関係から独立の商品形態の価値の生成構造を解明する商品の形態的三層構造論の内の実体論につながるものである。

若きピアトリスの経済学について結論として、彼女は、1886年の「イギリス経済学の歴史」では、個別化された個人そのものでなく、つながる人間関係を社会的本質とし、個人間の欲望と能力のつながりが経済的な欲望と能力の関係として現れ、その交換価値関係が貨幣で表示されるとして、三層の社会関係を提起したのである。それは、個人間の欲望と能力の結合関係という社会的本質が交換価値の関係に現象する関係であり、その交換価値関係の表現関係が貨幣であるという観点である。

ピアトリスの「イギリス経済学の歴史」におけるこうした社会学的経済学の新たな見解と、個人間の欲望と能力の結合関係という社会的本質が交換価値ないし価値に現象するという、非労働主義的価値関係の考察は、1887年の「カール・マルクスの経済理論」における商品の形態的価値関係を主張する基礎であった。

残念ながら青年ピアトリスは両者を総合して展開することはしていないが、そうした営為は、個人間の欲望と能力の需給的結合関係を実体ないし源泉とする、形態的三層構造を有する商品価値論を指し示すのである。

(3) 平成 27 年度

当年度作成の『経済学の座標軸』論文は、ピアトリス・ポッター・ウェップの修業と徒弟の時代末の1886年～1887年春の自律と独立に注目する。彼女は貧困問題の社会的な解明・解決のため、貧困の原因を「診断」できる経済学を求めて、古典派政治経済学原理を批判し、社会的病理の診断ができるような原理の修正と、国家介入を求めた。師のスペンサーは、リカード原理主義と自由放任哲学からそれを批判した。ピアトリスの反批判は、古典派政治経済学の原理が妥当しない19世紀末の社会変化の認識の問題と、政府介入の必要性を提起するのである。

当年度の『グローバル資本主義と段階論』では、ピアトリスの福祉経済学を評価する基準となる社会経済学を、宇野弘蔵の段階論の検討から方法的に構成した。これは、社会経済システムにおける労働・イデオロギー編成の構造と動態との総合的把握を追求する社会経済学の研究の一環である。それは世界や社会における経済の構造と機構、社会的必要労働群、近代以降の商品経済による社会的必要労働の包摂・編成による資本主義化と市場経済システム生成を体系的に把握する方法を探求するものである。

ここでは、宇野弘蔵著『経済政策論 改訂版』における宇野の経済政策論を軸とした段階論の方法を検討し、資本主義的社会経済システムの経済機構・機能の成立、および、資本主義主導の世界・社会システムの歴史的变化を把握する方法のヒントを把握することを目的とした。宇野の段階論における大きなヒントとして、社会経済の諸領域の関係性が示される点が重要である。それとともに、宇野の政策論には政策決定主体として階級的集合的な当事者の資本家の意識やイデオロギーの基底的影響が重視されて、制度主義が用いられていることも注目される。また、宇野の経済学の方法は、社会経済学の理論構成の方法に対して、論理的・原理的基礎として商品経済的形態によって社会的必要労働が編成されるという、商品経済化や資本主義化の観点の必要性を示しているのである。

宇野『経済政策論』で、政策現象の分析が市場経済領域にとどまらず、市場経済領域と政治政府領域の関係や、他の分野も対象とすることが、まず注目されるヒントである。宇野の段階論は、市場経済ばかりでなく政府と政策とイデオロギーを含み、金融や財政の諸経済領域を含む、資本主義的な社会経済を対象としているのである。宇野は『経済政策論』で、政策当事者の価値判断や世界観などを排除して分析するマックス・ウェーバーの政策科学の価値判断排除論を批判した。宇野自身は、政策当事者のイデオロギーを政策論・段階論の分析の対象とし、資本家の利害や価値判断を伴う社会的な「補整」過程により結局は、それが政策を規定すると指摘する。

また、宇野がウェーバーの理念型論について一定の批判と親和性を示したことも大きなヒントである。さらに、宇野はウェーバーとともに、科学主義として分析者のイデオロギーを排除しつつも、共通して市場領域の資本と政治領域の政府との現象と関係、社会経済における市場の経済・社会と政府の政治・経済との関係性を対象としたことが、大いに注目される。ただし、分析者の主観を排除するこうした科学主義を、一貫して採用することが妥当か否かは検討を要する問題である。

宇野段階論の研究対象領域の把握と社会経済学の伝統を比較すると、宇野の特徴として、社会経済における生産様式が商品経済システムに包摂され、資本主義として市場経済

領域とそれに接する外部経済領域の生成する関係をあげることができる。また、宇野段階論には政策決定における資本家階級関係の規定性という、制度主義の方法を認めることができる。宇野は社会経済領域の根底に「経済機構」の存在を示すが、それは一般には社会的必要労働が何等かの形態により社会的に編成される、社会的形態と社会的実体の関係構造を見る観点を指摘したといえる。すなわち、社会経済の動因に商品経済をなす資本などの流通形態による社会的必要労働という社会的実体の包摂・編成として資本主義化をとらえる観点なのである。

宇野段階論の対象領域では、家族的領域と公共・社会的領域は軽視されているが、社会経済システムを対象とする社会経済学の対象経済領域は市場経済にとどまるものではなく、社会経済の市場・政府・家族・公共連帯社会の4領域の経済と、何らかの形態の主体や生産様式を通じた、それらへの社会的必要労働配分を含むものといえる。

宇野とウェーバーとの政策論の議論の比較から、社会経済学の展開のヒントとして、主体のイデオロギーや価値判断を分析対象とすること、社会・世界の経済領域の政府・市場・家族・公共社会領域への分節関係と、商品経済という資本を主体とした流通形態による労働の包摂・編成と、社会経済諸領域への必要労働配分と、そこから生成する資本主義的市場経済関係の多層の社会経済構造の生成を指摘できる。段階論の対象の世界編成関係を見ると、今般のグローバル化も世界の領域・諸生産様式・必要労働編成に対する金融資本を主体とした商品経済による包摂の現局面であって、地球世界にグローバル資本主義化という現代特有の資本主義主導の社会経済関係を生成させ続けている。

以上は、変容/進化する現在の世界社会システムの、社会経済の構造と動態との主要動因/エンジンと言えるグローバル資本主義化という「経済機構」ないし経済機能の生成の基本的論理を探求し、商品経済が社会経済の諸生産様式を包摂し社会的必要労働を編成・配分する関係を軸とする社会経済の考察を、宇野の段階論の議論と、宇野のマックス・ウェーバー批判の議論から社会経済的領域構造と主体性などのヒントを得て深く推し進め、社会的必要労働の編成・分節・配分の意義を追求していったものである。

以上の論考を含むピアトリスの青年期の社会診断理論の探求についてみると、彼女の社会問題の診断理論である社会学的経済学と社会病理学のうち、社会病理学は進化主義の性格を持ち、政府の介入主義を要請するものである。だが、それらはまだ、熟年期の彼女の議論における社会経済学と福祉経済学と比べると形成途上のものである。彼女の社会病理学の集合的な集団間の制度主義への展開と、福祉経済学の完成への道の研究も重

要である。

これまで、ピアトリスの1886年と1887年の論稿と、彼女のハーバート・スペンサーとの交流の検討から、彼女が青年期に探求した社会問題の「診断」の理論が社会学的経済学と社会病理学であることを確認し、それらが政策論的には政府の介入を要請する介入主義の性格をもち、社会理論としては進化主義の性格をもつことを確認した。しかし、それらの理論はまだ、熟年期の彼女の議論における社会経済学としても、福祉経済学としても形成途上のものである。

(4) 平成28年度

ピアトリス・ウェッブの福祉経済学の検討で重要な点は以下のようなものである。彼女が社会的な貧困問題の解明・解決のため、貧困の原因を「診断」できる経済学を求めて研究したこと、古典派政治経済学原理を批判し、古典派政治経済学原理を社会的病理の診断ができるように修正した経済理論を形成したこと、貧困救済対応策としての政府介入を求めたことである。また、スペンサーが古典派政治経済学原理主義と自由放任哲学から彼女の理論を批判したさい、ピアトリスが「反批判」して、古典派政治経済学の原理の現実類似性が薄れてきた19世紀末の貧困という社会的「病状」の「診断」と、政府介入の必要性の問題を提起したことである。

結論として、ピアトリスの福祉経済学と、その前提する経済理論は、市場と外部の経済の領域の区分と関連、および、社会経済学領域論の方向性をもつ進化論的制度経済学であること。それは社会労働編成についての連結性向という新たな視点をもたらす意義のあるものなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

— 佐藤公俊、ピアトリス・ポッターのマルクス価値論批判、長岡工業高等専門学校研究紀要、査読あり、第50巻、2014年、p.9-20

— 佐藤公俊、ピアトリス・ポッター(・ウェッブ)の経済学研究：1886年の独立宣言；"The History of English Economics"草稿についてのハーバート・スペンサーとの論争、社会理論研究、査読あり、第15巻、2014年、p.22-34

[学会発表](計9件)

— 佐藤公俊、資本主義社会における家族と労働、近代思想研究会、武蔵大学経済学部(東京都・練馬区)、2017年1月16日

- 佐藤公俊、若きピアトリス・ウェブの社会経済研究、社会理論学会研究会、渋谷区笹塚区民会館（東京都・渋谷区）、2016年7月14日
- 佐藤公俊、若きピアトリス・ポッター（・ウェブ）の経済研究、経済学史学会第80回大会、東北大学経済学部（宮城県・仙台市）、2016年5月22日
- 佐藤公俊、若きピアトリス・ポッターの経済学の形成、仙台経済学研究会、東北大学経済学部（宮城県・仙台市）、2015年8月22日
- 佐藤公俊、宇野段階論における主体、制度主義、社会経済的領域構造、SGCIME合宿研究会、八王子セミナーハウス（東京都・八王子市）、2015年8月9日
- 佐藤公俊、若きピアトリス・ポッターの経済学の形成、仙台経済学研究会、埼玉大学東京ステーションカレッジ（東京都・中央区）、2015年3月22日
- 佐藤公俊、ピアトリス・ポッターのマルクス価値論批判について、経済理論学会第62回大会、阪南大学（大阪府・松原市）、2014年10月26日
- 佐藤公俊、1886年のピアトリス・ポッター（・ウェブ）の経済学の方法の展開、第107回社会理論学会月例研究会、大東文化会館（東京都・板橋区）、2014年4月26日
- 佐藤公俊、ピアトリス・ウェブの経済学の方法の変遷、経済理論学会第61回大会、明治大学生田校舎（神奈川県・川崎市・多摩区）、2013年10月6日

〔図書〕（計 2 件）

- 佐藤公俊 他、SGCIME 編、御茶ノ水書房、グローバル資本主義と段階論、2016年、350 ページ
- 佐藤公俊 他、仙台経済学研究会編、社会評論社、経済学の座標軸、2016年、356 ページ

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：
 〔その他〕
 ホームページ等
 特になし

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
佐藤 公俊
 (SATOH Kimitoshi)
 長岡工業高等専門学校・一般教育科・嘱託教授
 研究者番号：00178716
- (2) 研究分担者
 ()
 研究者番号：
- (3) 連携研究者
 ()
 研究者番号：
- (4) 研究協力者
 ()